

## (2) 教育 IR センターからの総合報告 －2020年度(令和2年度)－

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター長／京都工芸繊維大学 教授  
萩原 亮

### はじめに

当教育 IR センターの任務も4年目となり、そろそろ後任者への引継ぎなどを意識してファイルの整理をしておこうなどと思っていた矢先、虚をつかれるように「コロナ禍」の嵐に見舞われ、はじめは困惑と戸惑い、後の方では正直に言って困憊を覚えながら、本年度を過ごすことになった。いやが応もなくオンライン授業の経験を積む中、(一講義担当者としては) あらためて悟ったことなどがいろいろあるけれど、さて、三大学教養教育の運営組織の一環にある教育 IR センターとして今の時点でできることは何か、未だよく見えないうちながら、それぞれ独自の方法・工夫を駆使して今年度の共同化科目担当を進められた教員諸氏に対し、各講義の外側のセンシングに入ってくる情報を(整理不十分でも)示すことには一定の意義があると考えてるので、まとまらないことを覚悟の上で本稿を書かせていただく。メモ風あるいは断片的な内容になってしまうと思うが、何とぞ寛容にご覧いただきたい。

### 1. 実施状況と履修登録者数の推移

はじめに、今回の事態の下、本年度の共同化教養科目がどのように実施されたかを簡潔にまとめておく(より詳しい情報は本報告書第1部(4)に記載されている)。まず、前期科目の受講登録・授業開始のときに最大の激震があった。学年開始早々に、教室の定員を減らし(人の密度を下げ)た形で5月連休明けから対面授業を開始する方針が出され、それに応じて、今年度前期のクラスの受講者数を大幅に制限する措置がとられた。その方針でクラス分けされた後、全ての授業をオンライン形式にすることが決まった。こうした経緯によって、受講者の総数を例年の2/3に圧縮して前期授業を走らせることになったわけである。一方、後期授業については、早い時期(前期の6月)に、オンライン方式に統一する方針を定め、各クラス定員は例年どおりとされた。学生が、前期に履修しそびれた科目数分を、後期に挽回してくれることが期待に含まれていたと思う。

こうしたコンディションの下、結果的にどのよ

うな受講登録状況になったかを観ていく。図1は、大学別総受講者数を、前期・後期別に歴年推移として描いたグラフである。前期(a)における本年度の人数減少は、意外にも、工織大生に集中する形になった(工織大生の前年比減少率は2/3よりもずっと著しい)。対して、府立大と府立医大の減少率は僅かである。工織大生は、希望科目のターゲットをしばり、希望が通らなければあえて他科目をとらない動向を示したことが窺える。ところが一方、クラス定員に特段の変更がなかった後期(b)に目を転じると、確かに、主として工織大生の数が増加しているが、前期の減少分を補うほどの変化にはなっていない。結果として、本年度の工織大生の教養科目の履修には(平時の履修に比べて)相当の積み残しが生じたことになる。次年度における特に工織大2年次生の教養科目の履修動向や時間割の組み立て方を注視していく必要があるだろう。

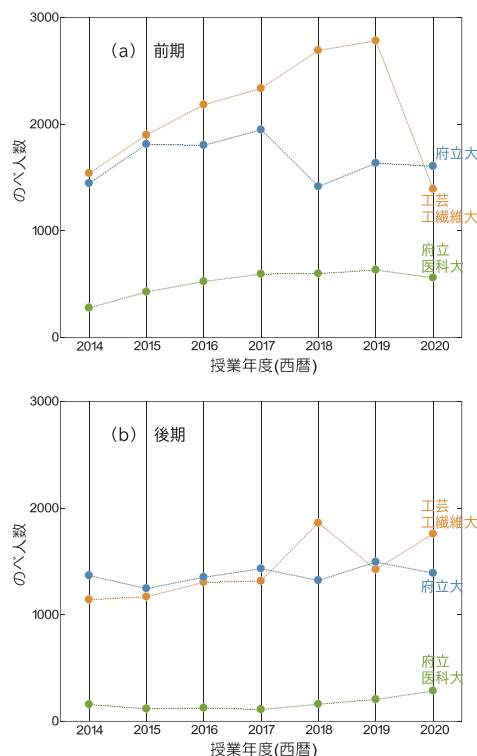


図1. 共同化教養科目全体に対する大学別履修者数の年度推移。(a): 前期科目、(b): 後期科目。

表1. 2020年度開講各科目の履修登録者数の分布状況. ポイントは  $\log_2(\text{登録者数}/\text{人})$  の値. (a) 前期、(b) 後期それぞれについて、過去4年分の平均人数に対するポイントと、本年度ポイントを表示.  
(※: 新規開講 †: 集中講義 (リベラル・アーツゼミナール科目は含めていない。))

(a) 今年度前期 科目名(順不同)	過去4年の 登録者数 平均のポイント	本年度の 登録者数 ポイント	(a) 今年度前期 科目名(順不同)	過去4年の 登録者数 平均のポイント	本年度の 登録者数 ポイント
医療人類学(※)	—	5.93	SDGsをまなぶ(※)	—	6.51
エネルギー科学	6.39	6.79	アジアの歴史と文化	6.59	6.83
化学概論I	6.34	5.93	意外と知らない植物の世界	5.31	4.81
科学史	7.23	5.93	化学概論II	4.44	5.86
環境問題と接続可能な社会	6.52	6.71	環境と法	6.17	5.78
キャンパスヘルス概論	7.57	6.88	京の意匠	5.21	6.00
京都の自然と森林	7.53	7.48	京都の経済	—	6.87
京都の文学I	6.49	5.91	京都の農林業	7.60	7.60
京都の歴史I	8.03	7.47	京都の文化と文化財(※)	—	6.85
近代京都と三大学	6.20	5.88	京都の文学II	6.51	6.41
現代科学と倫理	4.86	5.95	京都の防災と府民	—	6.83
現代京都論	7.80	6.91	京都の歴史II	7.59	7.54
現代教育論	7.48	6.87	経済学入門	6.03	6.88
現代世界とジェンダー	7.04	6.88	現代社会と心	7.60	7.60
国際政治	5.64	5.91	社会学II	6.87	7.41
社会学I	6.76	5.91	宗教と文化	5.77	6.11
食と健康の科学	7.32	6.64	人文地理学II	6.94	7.34
心理学	7.47	6.67	政治学	4.75	6.07
人文地理学I	7.59	6.89	生活と経済	6.40	5.88
生物学概論I	6.90	6.89	生物学概論II	6.52	6.15
生物学的人間学	6.57	7.09	西洋文化論	7.00	7.29
生命科学講話(†)	9.34	7.50	地球の科学	7.43	7.44
西洋文学論	5.33	6.70	東西文化交流史	7.19	7.59
哲学	6.41	6.71	日本近現代文学	6.86	7.03
発達心理学(†)	7.42	6.70	日本近代精神	6.42	4.95
人と自然と数学 $\alpha$	6.82	6.77	日本史	6.97	6.85
比較宗教学	7.48	6.87	認知心理学(※)	—	6.88
美と芸術	7.49	6.71	人と自然と数学 $\beta$	5.24	3.58
物理学I	7.04	6.83	人と自然と物理学	4.34	5.46
法学	—	5.83	文芸創作論	5.19	4.91
ヨーロッパの歴史と文化	7.28	7.44	ラテン語	6.95	6.79

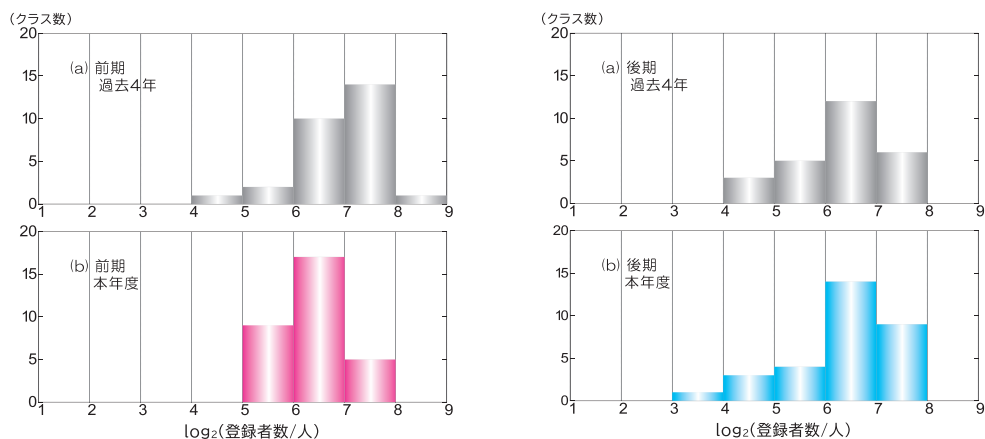


図2. 受講登録者数ポイントの度数(クラス数)分布. (a): 前期科目(左側)と(b): 後期科目(右側)それぞれについて、上段に過去4年間の平均に対する分布、下段に本年度の分布を示している.

以上の大枠を把握した上で、各科目の履修者数の変化を観ておこう。前回までに、科目毎の受講登録者数を歴年追跡したグラフを示してきた。前期・後期それぞれ特徴的な変動パターンを示す過渡状態を経て人数分布が落ち着く様子がわかって一段落したところだったが、コロナ禍インパクトの勃発によって、原点リセットの機が与えられた。そこで今回は、今年度実際に開講された科目についての登録者数を表にして、過去4年分の平均人数と比較する形で掲載する(表1)。人数は、(従来と同形式のグラフ表示をリポートすることも念頭に置き)2を底とする対数値のポイントで表した。さらにIR的視点で、各講義の履修者数が分布する様子を把握すべく、表1のポイントをヒストグラム形で表してみると、図2(a),(b)のようになる。同図の縦軸値は横軸人数区間に対応する講義クラスの数である。前期科目の(a)を見ると、当然の成り行きとして、昨年度まで大人数側にあった分布が無くなり、中程度(〜 $2^6$ 人)に集中する形を呈している。対して、後期の(b)は、例年に比べ大人数のクラスが顕著に増えた分布になっている。前期に受講希望が叶わなかった学生の後期の動きとして素直に理解できる。

こうした今年度の受講者数とクラス人数の分布を総合的に眺めると、一つの問かけがもたげてくる。今回前期の人数圧縮は、確かに学生の希望を損ねるものだったが、一方で、前期に多く存在していた巨人数の教室クラスが無くなり、従前指摘していた前期側に総数が偏る傾向も(強制的とはいえ)ほぼ解消されたとの見方ができる。私は、かねてより、十分な教育的フィードバックを実現するには、クラス人数は $2^6$ (64)を大きく越えないことが望ましいと考えている。今回、期せずして、人数分布を理想に近づける実験が為されたわけだが、実際に担当された各位はどのように受け止められたかに関心が向く。もちろん、今回の事態では、突然のオンライン授業対策が難題そのものであったから、クラス人数の問題につなげる議論は馴染まないと承知しているが、今後、各授業におけるフィードバック充実等を検討するときの再参考材料になると思う。担当各位から意見をいただき意見を交わす機会をもてればよいと考えるところである。

## 2. オンライン授業を受講した学生の声

今回の非常事態に応じ、3大学がとった授業体制の方針は少しずつ異なり、また、前期と後期で扱いに変化があった。そうした中で、先述のとおり当共同化教養科目は、一貫して‘オンライン’方式で実施された。その際、3大学が導入している遠隔教育用のシステムに違いがあるため、講義担当者と受講者の所属が異なるケースに対応するための苦労や混乱が多々あったことを聞いている。残念ながら、当方としては、そうした運営技術面に関する知識を十分得ていないので、ここでは分析・コメントを控え、尽力いただいた関係各位に対し感謝の意を表すにとどめたい。ここでは以下、オンライン授業の実施について、各大学が学生に対し実施したアンケートの回答等を閲覧して、気づいたこと、考えること等をメモ風に記述する。

### (a) 回線等の環境

スマートフォンの所有が当たり前の時代・世代ということで、インターネットが使えないとした学生は当初よりいなかった。ただし、スマホのデータ通信とは別の常時接続環境が無いとした1年次生は、前期には約3割とする調査例があったが、後期登録時の正式調査では14%程度に減っていた。都合のよいときにファイルをダウン・アップロードすればよい‘オンデマンド’方式ならば、一時的な有償接続やフリースポットサービスでも対応可能だが、動画によるライブ形式の講義を受ける場合には高速の常時接続が要件になり、深刻な問題となり得る。そこで実際の学生の声(ただし届いた範囲)を探ってみると、通信に由来する不満は意外なほど少なかった。この背景には次のことがあるようだ。前期から後期に向け、多くの教員がTVミーティングシステムによるライブ形式に舵を切る中、徐々にシステムの機能にも精通して、ライブの記録ビデオをオンデマンドでも提供する方式が標準化した。一方、学生の側も、現実的な危機感に促され、ネット通信環境の整備(居住場所選定を含む)を進めたことが窺える。首尾よく実施された本年のオンライン授業は、こうした教員・学生双方の動きの上に成り立った、きわどくも絶妙の結果だったと言える。

### (b) オンライン講義の内容に対する意見

肝心なのは、オンライン方式の教育内容に対する学生の受け止め方である。まず目につく意見は、丁寧な解説を伴わない資料・課題コンテンツに対する苦言である。文章ベースの解説をつくることの大変さは、今回、教員は皆痛感したと思うが、それは、話し言葉による説明がそこそこ‘いい加減’で済むことの裏返しでもある。公表可能グレードのオリジナル解説をつくり上げたならば、それは、対面授業に戻った後にも大いに生きるはずである。ご担当者諸氏には、是非、今後も継続的に‘読める’説明文書の整備を進めていただくのがよいと思う。

また、「課題が多すぎる」旨のクレームを(教養科目外を含めた様々な場面・ルートで)非常に多く聞いた。「一つもない週と多数の週のムラがあるから教員間で調整せよ」という訴えもあった。これらに対して思うことはやや複雑である。教員側が、反応の見えない学生に対し、学習を確認すべく何かの提出を求めるのは自然なことだろうし、授業時間外の学習は本来必須であるから、毎週受講科目の数だけ課題があって然るべきとも言える。それが、是正すべき問題のようになってしまうのは、大学を、生涯最も勉強に専念する場や時期と思わなくてもよいとする、昨今の日本特有に醸成されてしまった嘆かわしい感覚に根ざしているとするれば、我々は胸を張って突っぱねればよい。しかし、「提出に対するフィードバックがない」とする苦言も少なからず見られ、説明用コンテンツの準備不足を課題で穴埋めしている側面があったかも知れないとの自省ももたげてくる。私の経験で述べるならば、日頃の理解度チェックには、フォーラムのディスカッションが好適に使える。先行提出された他者の書き込みが見えるので、筆記試験のように扱えないが、問いかける題材を工夫して、学生どうしの意見交換に導くことができる。議論的な書き込みに正当な評点を与えることに無理はない。また、教員も議論に加わりながらときどきアドバイスする方式ならば、労力を節約してフィードバックが達成できる。対し、レポートにコメントを付ける方式は、受講者が多くなれば限度を越える苦行になってしまう。

最後に触れるべきは、主にオンライン上の相談を通して少しずつ伝わってくる「友人をつくって情報交換等したいがそれが叶わない」旨の声であ

る。これは、本年度入学生が抱える(心理側面にもかかる)最も重大な問題だ。軽々に論じることができないが、ライブ形式の講義の中で、学生の自己紹介や意見交換をとおして個々の発言を促すことが一定の好効果を与えた感触はある。ただし、自ら声を出してアピールすることが苦手な学生が確かにいて、オンラインの方式上、そこに手を差し伸べる手立てはなかなか見つからない。本年度の学生の就学状況については、単位取得の成否だけでなく、オンライン上の参加状況を調べ、必要に応じて、次年度なるべく早期に、個別面談による再履指導などを行うことが必要だろう。

## むすびのひとこと

大それた事でもなく、壁を乗り越えるように理解が進むときには、①素地としての思考力、②広範に渡りかつ最低一領域は深くに及ぶ知識、③離れた事物の関係に気付く発想力 のどれもが必要だ。大学の教養と基礎系科目の教育は、このうち②の後半以外の獲得を支える根幹の役目を担っている。―が、昨今の時流・外圧・内圧の中で、大学教育におけるこれら3項目内訳のバランスが保たなくなってきているのではないかと沈痛になりかけていた私の気分は、今期のオンライン授業中の学生の反応のおかげでかなり立ち直った。少なくとも私が接した新入生は、文・理を横断する基盤的思考力の意義を認識し、それを獲得する心構えを有していることを実感した。「学生は、即効的に分かり、効用が見えることを求める」などの説に惑わされる必要はなかったのだ。将来の真の難問に立ち向かう叡智を生む土壌はちゃんとある。非即効的な真の思考力の育成に対して及び腰になるようなことは、ゆめゆめあってはならない。オンラインコンテンツの準備の狭間に胸中巡ったことである。